

# 徳泉寺報

No.0013

発行  
平成30年11月

発行元 徳泉寺

仙台市宮城野区  
榴岡3-10-3

(022) 297-4248

## 平成三十年度 報恩講 勤修

去る十月二十四日（水）徳泉寺本堂にて平成三十年度報恩講が無事に勤修されました。当日は十五人ほどの各寺院ご住職と四十五人ほどのご門徒の皆様にご参詣いただきました。

報恩講とは宗祖親鸞聖人の御命日をご縁に、真宗各寺院で年に一度必ず行われる法要です。報恩とは恩に報（むく）いるとか恩を報（し）ら（せ）るという意味があり、阿弥陀の教えが私のところまで届いたことに感謝し、今一度私を見つめ直す一日にしよう、という願いが込められたお講です。徳泉寺では「お斎（おとき）」「勤行（ごんぎょう）」「法話（ほうわ）」の流れでお昼をはさんで開催しています。

準備には主に同朋会会員と門徒有志の方々が数日前から足を運んでくださり、仏器の『お磨き』から、『境内の手入れ』『本堂清掃』『お飾りの準備』『お斎の食事準備』など隔から隔まで多くの方に関わっていただいていた日を迎えます。特に料理に関してはレシピはあるものの味付けや細かい作業などのほとんどが口伝で、何品も大量に作るので大変です。しかし、おかげでできあがったものはここでしかいただけないご馳走となり、参詣者の多くが楽しみにしておられます。

毎年このことですからみなさん手際がよく、新しい方には先輩方が丁寧に寄り添い一緒に作業して、脈々と徳泉寺の報恩講が受け継がれているのを目の当たりにします。多くの方に支えられることでお寺がご門徒のみなさんと共有されているということを改めて実感し、感謝の一日となりました。



法話 講師 藤内和光 師  
(いわき市明賢寺・住職)



我々はみんな違うのに合わせようとしたり、人の役に立たなければ存在価値がないように思っただけで自信を持ってません。しかし「私」が「私」をただひとり尊べる、愛せる存在なのだということに気づいていけばいいのです。

この「私」ですが「自我の私」とは「自分の好きな理想の私」です。しかし、「現実の私」は「あまりにも情けなくておそまつで貧相な私」なのです。「自我の私」イコール「現実の私」ではありません。そこにギャップを感じて苦しくなってしまう。本当に愛すべきは「自我の私」ではなく「現実の私」です。何もできなくて悲しくてさびしい私、現実の私なのです。その「私」が存在しているのもいいと認められてこの世に存在しているのだからそれだけでいいのです。ただ、存在している私を認められ、受け入れられ、尊べるものになる、それがご信心をいただくということなのです。

《講師法話より 一部抜粋》



お磨き



幕張り



お斎作り



勤行